

# RE 02

RUBBISH  
Selecting  
Squad's  
erotica



presented by  
RUBBISH Selecting Squad

**FOR ADULT ONLY**





# 前書き

なのはさんの「全力全開ッ！」って所謂某筋肉弟の「100%中の100%だぁッ！」と同じ意味だよな。

はじめまして&いつもありがとうございます、無望菜志です。  
すっかりなのはさんとフェイトさんにやられてしまい、  
ちょっと句を外しつつも一冊作ってしまいました。

しかし今更ですが本当に面白かった。  
百合も萌えも燃えも味わえるなんてなんて贅沢だったんでしょうか。  
なのは、フェイトを筆頭にどいつもこいつも美味しいキャラクターで、  
まあ…シャマルさんはちょっとアレな娘さんな気もしましたが…。

まだ見たい、もっと続けて欲しいのが本音ですが  
腹八分が一番美味しいのでしょうか。  
惜しみつつ残りのDVDを待つとします。

まあ、続編出たらあっさり釣られるつもりですが。

さて、今回なのは本にしてはちょっとハードモノなので  
需要があるか甚だ不安なのですが、そこはそれ、  
好きな子は苛めたくなる可愛そうな男の思いを  
理解して下さる方がいると信じております（汗

それでは最後までお付き合い頂けますよう  
よろしくお願ひします。

## 目次

P 05	「フェイトちゃんご乱心なの」	無望菜志
P 26	「No. 10」	高橋良樹
P	「ヴィータがはやてにご奉仕なの」	蒼井村正
P	ゲストイラスト	B-RIVER





ジュエル…  
シード…？



これは…



ああ、ユーノに  
頼まれてね  
研究資料として  
持ってきて欲しいって

全く

ボクを使い走りに  
するなんて  
いい度胸している

でも危険じゃ  
ないの…？

封印はしてあるし  
よほど強い魔力と  
想いを込めなければ  
大丈夫



キラ…



ああ

触ってみるかい？

うん…



これがきつかけで  
なのはと出会って  
もう1年か…

色んな事、  
あったな…

なのは…

うわーぎゃー

ク、クロノ君ッ!?





それにフェイトの魔力…



妹になる子に本気を出すわけにはいかない



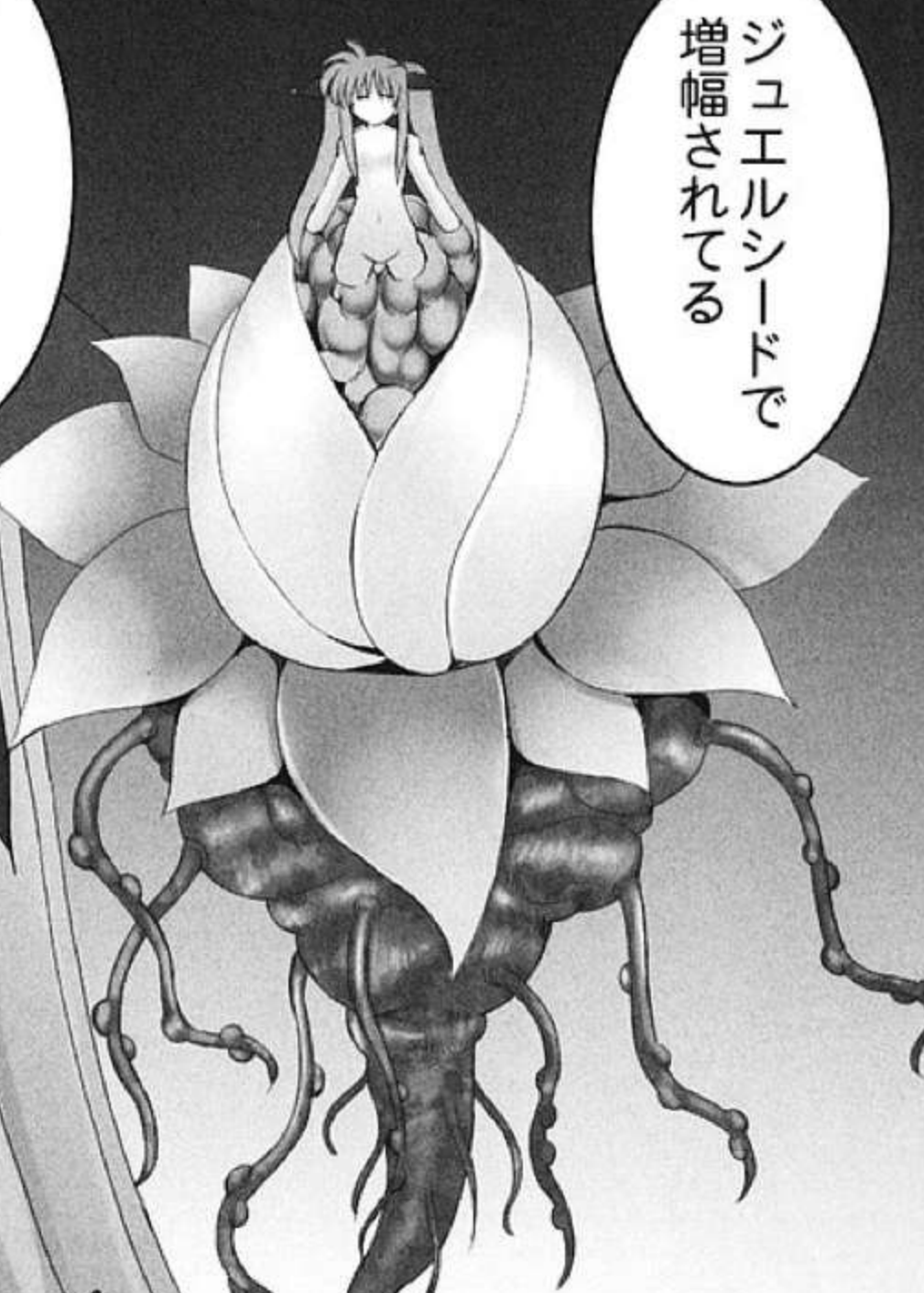
凄くやる気ない声だけど、だ、大丈夫？

しようがないだろッ



かといってスターライトブレイカーなんて使ったら…

封印の魔法は通用しない



ジュエルシードで増幅されてる



簡単だよッ



ど、どうしたらいいの!?



フェイトちゃんまで……





ユーノくんツ!?

願いを  
叶えてやればいい!



多分なのはと  
一緒になりたい  
んだよ



動きを見てると  
彼女はなのはを  
集中的に狙ってる



ふわあツ!?

一緒って  
どういう...





なのはは  
フェイトの事  
好きなんだろッ!?

あ、あたりまえだよ



落ち着いて!

姿は変わっても  
フェイトである事には  
変わらない!



よし、  
なら大丈夫

へたに  
抵抗しないで  
受け入れ  
るんだ



君の痴態もとい  
雄姿はちゃんと  
見守っているからッ!

ガンバレ  
なのはッ

ふえええッ!?



なの…は…

きゃんツ

カクツツ

あ…  
フエイト…ちゃん

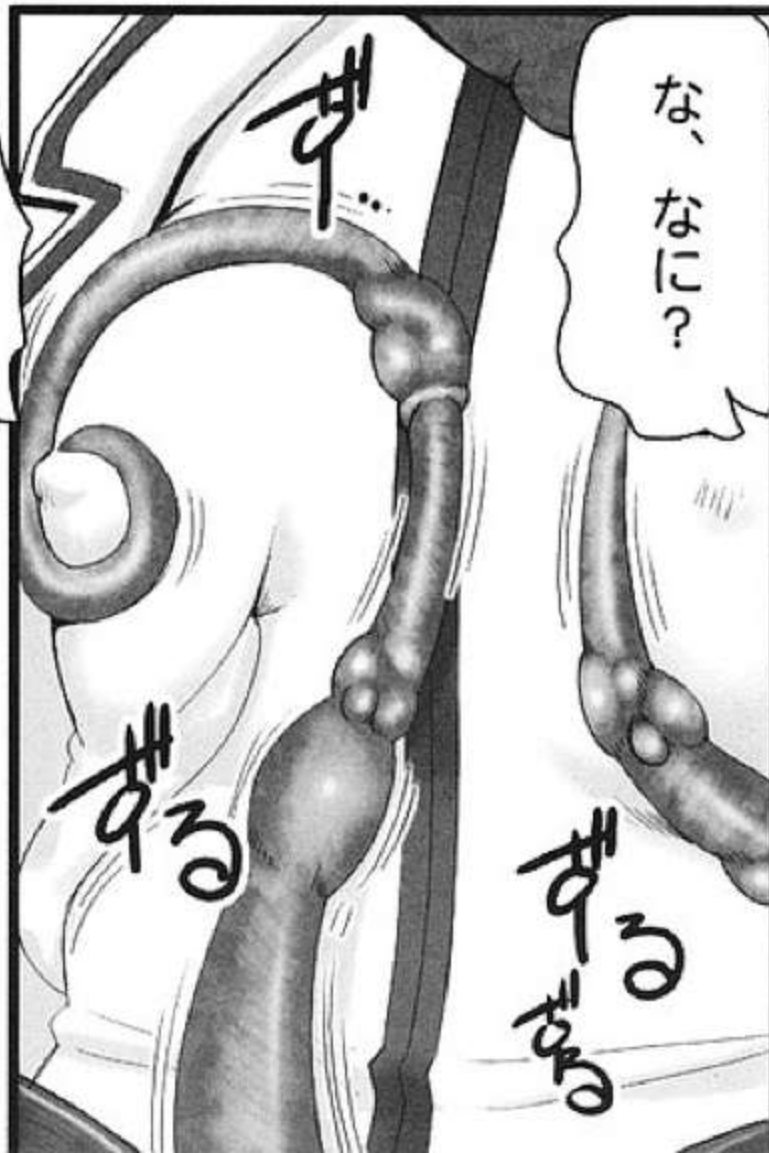
なの…は



や、そんなツ

ぬ、脱げ  
ちゃうよおツ

ズ  
ズ



な、なに？

ず…

ずる

ずる



はう!?





こんな格好  
ダメなのに…ッ！

やあんッ  
ダメ…ッ  
ダメなの…

ずる

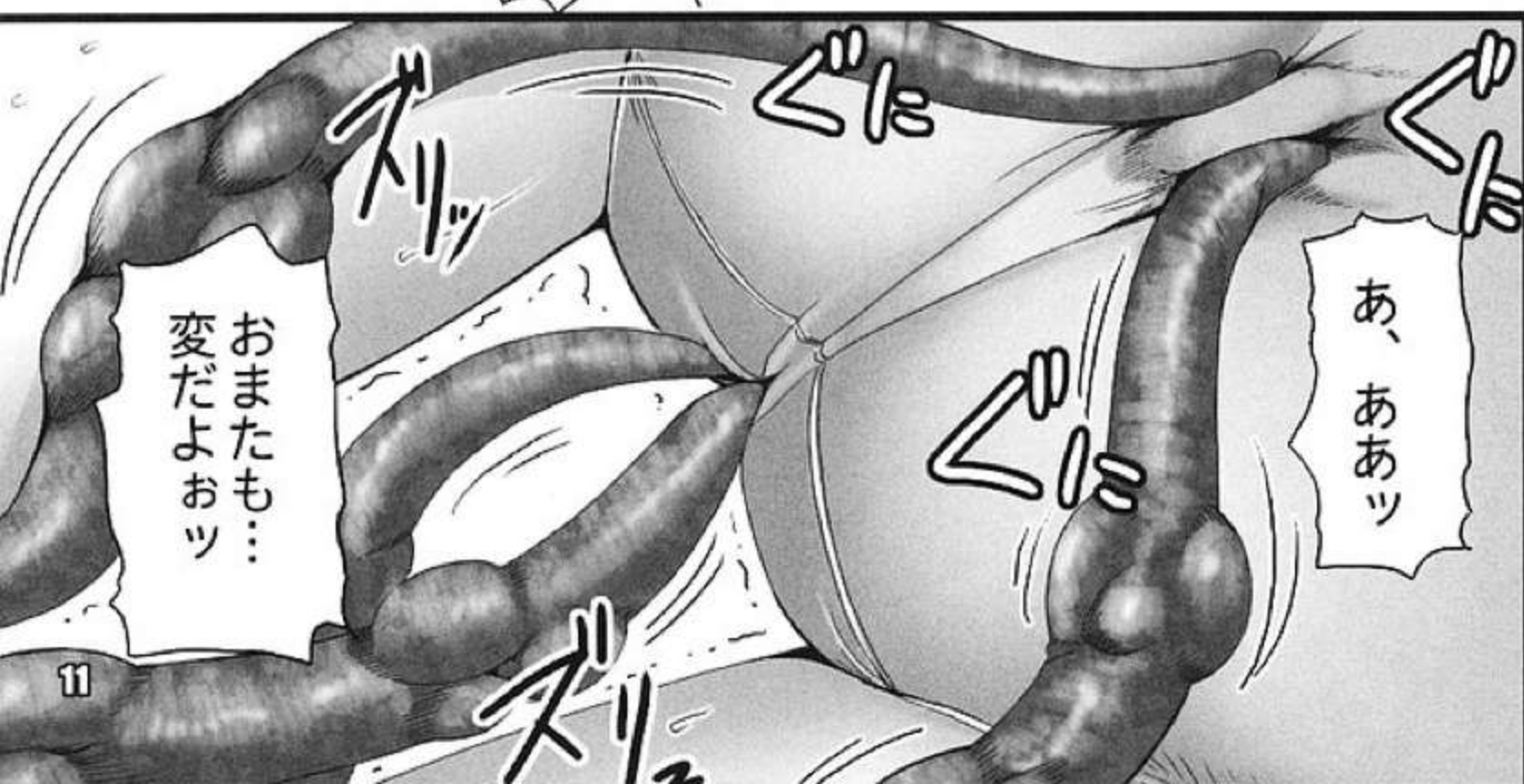
ずる



お胸ッ…  
ジンジン…ッ

ツあん

ダメ  
引張つちや  
ダメエッ



あ、ああッ

おまたも…  
変だよッ



は、ふああ

何か…  
変…なの…





やああああッ！



あ、だめッ

ダメダメッ



ダメなのに

ブツ



あッ

ああッ

あああッ!?



うッ  
あんッ

ひゃんッ

ジンジンするッ  
ジンジンしてっ！





















けど  
大丈夫だよ

痛い？

あ

あ

あ



私も母様に  
痛い事されたけど

すぐに



だから  
なのかも...



気持ち  
よくなったから









わらひ変なの…

変…なの



ふはッ！

ふあッ  
ふう…ちや…



ぞくぞくッ  
して…ッ！

けど…  
熱くて…うッ

急に…  
ふわふわって…  
してッ



うん…

頭ッ  
まっひろッ

泣いてるなのはも  
いいけど…



うん…

ふえい…と…  
ひやんッ…



















さ、しっかり休んで  
元気になってね

フエイトちゃん  
がいなくて  
私も困ってる  
んだから

え？

あれからね

ずっと…

ジンジン  
するの

お胸も…

おまたも…

だから早く  
元気になって…

また、しゅっ…





RE02



# 「No. 10」

小説：高橋良樹  
挿絵：無望菜志





「この……だっ子！ 言うことを……聞け！」

フェイトは爆煙の中から飛び出しながらそう叫んだ。そのまま黒衣の魔法少女は空を切り、神速のごとき素早さで闇の書へと突進する。金髪のツインテールが水平になびくほどの速度だ。防御力を極限まで削り、一撃必殺のスピードにかけたソニックフォームであるからこそ可能な速攻であった。

本当なら、こんな実力行使などしたくなかった。話し合いのうちに解決できることもある。闇の書は自身を「道具だ」と言い切った。感情など無いと、言い切った。しかし道具は涙を流さない。それは明らかに感情を持った一人の人間としての反応なのだ。ならば、話し合いが出来ないはずはない。

(だけど……)  
宙を舞いながら、フェイトは一瞬自分の過去を思い出した。言葉は確かに心に響く。それは間違いない。なのはの誠意ある言葉は次第に心に染み渡り、今では彼女と自分は無二の親友となった。しかし、戦いの中でしか分かり合えないこともある。自分と相手の力をぶつけ合い、認め合ってこそ出来る理解もある。

(なのはと私が、そうだった……)  
それを知っていたフェイトは、微かな葛藤を胸に秘めたまま闇の書へと接近する。今はこうするしかない。頑なに閉じられた心の鍵を一度打ち壊し、言葉を心に届かせるにはこれしかないのだと。

かわいらしさの中に凛々しさと、決意を秘めた表情を浮かべて更に闇の書へと飛びかかっていく。

黒いスパッツ状のバリアジャケットに包まれた身体を柔軟にひ

ねり、小さな手のひらにはめられた黒の指ぬきグローブに包まれた手に強く握り込まれた信頼できる相棒、バルディッシュ・アサルトを大きく振りかぶった。

しかし、闇の書は動じずにデバイスを開いた。

「お前も、我がうちで眠るといい……」

それと時を聞けず、フェイトが裂帛の叫びと共に闇の書に撃ちかかる。

「はああああああっつっつ!!!」

がきいいん!!

バルディッシュ・アサルトから伸びた光の刃は、闇の書の眼前に張り巡らされた紫色の燐光を放つベル方式魔法陣のシールドにより阻まれた。硬質な音が閉鎖された空間に響き渡り、火花にも似た魔法の残滓がシールドと刃の間で飛び散る。

「つ……」

まるで鉄板に斬りつけたような感触である。思いの外硬いシールドから跳ね返ってくる衝撃に、フェイトの全身が痺れる。秀麗な眉が軽い痛みに至み、ルビー色の瞳がきつくつぶられる。

しかし、フェイトはそれにもめげずにシールドを穿とうと更に力を込めた。黒いバリアジャケット越しに見える小さくて可愛らしいヒップがきゅつと引き締められる。

「つ、く……!!!」

ぎりぎりぎりつと一点突破を狙ってシールドをこじ開けようとするが、びくともしない。元々パワーよりは速度を生かした一撃離脱方式タイプのフェイトとしては、この状況は有利とは思えない。

しかし、「この娘は、昔の私の姿なのかも知れない……」という

闇の書の過去の自分にも似た境遇に複雑な心境を抱いていたフェイトにとっては、このまま諦めることはできなかった。それが歳に外れて優秀な黒の魔法少女の戦闘センスに、多少の影響を及ぼした。そして、それは致命の一瞬となる。

「かん……」

表情一つ変えずに闇の書はデバイスをぐつと前に押し出した。

ぎいいん!!

「うわっ!!」

それほど力を入れたようには見えなかったが、シールドの押し出しはフェイトの身体を易々と押し返し跳ね飛ばしてしまう。金髪の魔法少女の小さな身体が、無防備な状態で宙を舞った。その瞬間。

「ごがああつ!!」

コンクリートの裂け目から再び飛び出してくる無数の触手。それらが宙高く舞うフェイトの黒いバリアジャケットに包まれた肢体に殺到した。

「うっ、ああつ!!」

しゅる、しゅるる……!!

先ほどにも倍するような触手の群れであった。空中で完全に体勢を崩していたフェイトにそれをかわせようはずがない。肉組達はあつという間に魔法少女のスレンダーな肉体を戒めていく。両手は頭の上でパンザイをするような形で固められ、更に手にしていたバルディッシュ・アサルトの柄を肘に抱え込むような形にしてつつかえ棒にされ、完全に拘束されてしまう。



「くうっ……」

信頼できるデバイスの硬質な感触が触手の締め付けでぎりぎり  
と少女の抜けるような白い肌食い込み、強い痛みが走る。凛々  
しい少女の瞳が苦痛に歪んだ。

触手達は更に露出した両脚に、そして黒いスパッツのようなバ  
リアジャケットに包まれた太股にはいずり寄るようにして近寄っ  
ていった。触れば折れてしまいそうな華奢な両脚は、今まで幾  
多の魔法戦を繰り広げてきた歴戦のエースとは思えぬほどに白く、  
ほっそりとしている。少女らしく繊細で、優美な美しいラインで  
ある。そのおみ足に触手は蛇が獲物を捕らえるかのような動きで  
巻き付いていった。

肉縄にはめめりが無く、文字通り縄のような感触である。それ  
が故に、巻き上げられる過程で生肌を強く擦過されると、肌がひ  
りひりするような強い痛みを覚える。それでも力加減が絶妙な  
か、動きは封じるものの擦りむけたりはしなかった。

だが苦痛なことには変わりなく、荒縄で肌をやすりがけされる  
ひりひりする痛みと、摩擦熱に苦悶する。額からじつとりと脂汗  
が流れ出し、形の良いおちよぼ口から苦鳴が漏れ出した。

そうしておいてから、両脚に巻き付けられた触手がぐいっとフェ  
イトの両脚をそれぞれ右、左と反対方向に引っ張っていく。

「あうっ、くううっ……」

必死に抵抗しようとスパッツのようなバリアジャケット包まれ  
た内ももを筋張らせて懸命に力を入れるが、魔法生物である触手  
達の力にかなうはずもない。どんどん強まる張力にフェイトの股  
関節がぎしぎしと悲鳴を上げ始めた。

「んっ、んんん……ああっ……」

美少女の顔が苦しげに歪む。とうとう踏ん張りきれなくなり、  
フェイトの両脚がぐつと大きく開かされた。

「こ、こんな格好……」

俗に言うM字開脚の姿勢にさせられ、まるで幼児に用を足させ  
るときのようなスタイルで固められてしまった。自然腰が少し前  
に出るような形になり、「おしっこの穴」がある恥ずかしいところ  
を強調するような感じになってしまう。身体に吸い付くように密  
着したバリアジャケットがフェイトの割れ目に食い込み、うっす  
らと小さな縦じわを産み出していた。

「くうっ……」

気丈な魔法少女もさすがにこの姿勢には強い屈辱感と羞恥を感  
じる。ビスクドールのような白い顔がぼつと朱色に染まっていく。

「フェイトちゃん!!」

悲痛な叫びが下から聞こえた。親友の窮地に飛び出したなのは  
である。両脚にフライヤーフィンの赤い鱗光を纏わせ、コンクリ  
ートを蹴って宙を舞う。

「……」

闇の書は見向きもせず赤いラインの走った片手を白の魔法  
少女に向けた。その途端、コンクリートの地面が裂けてまたして  
も妖しげな触手が飛び出したではないか。フェイトの身体を戒め  
ているそれと同一の肉縄達である。

「きやあっ!?」

急いで空中に逃げようとするが、一瞬遅い。しゅるつと一本の  
触手が足首に絡みついた。獲物を捕らえた肉縄はなのはを地べた

へと強引に引きずり下ろした。

「あうっ……」

完全に体勢を崩してしまい、まともな受け身もとれないままに  
コンクリートの固い地面にお尻から叩き付けられるようにして落  
下してしまった。バリアジャケットのおかげでそれほどの痛みは  
なかったものの、尾てい骨をしたたかに打ったためなかなか立  
ち上がれない。

そうこうしているうちに、先ほどの拘束など問題にならぬほど  
の量が純白のバリアジャケットに包まれた小さな身体に殺到した。

「あつ、あああつ……」

得体の知れない生物にまとわりつかれる気色悪さに、なのはは  
鳥肌を立てて叫び声を上げた。栗毛の髪を打ち振ってレイジング  
ハートエクセリオンを振り回すが衆寡敵せず、魔法を使うヒマも  
なくあつという間に全身を貫ききのように縛り上げられ、身動き  
一つ出来ない状態になってしまった。

「あう……闇の書、さ……」

全身がギリギリと強く締め上げられ、息苦しい。それでもなの  
はは呼びかけを止めない。そんな純真な魔法少女の言葉に闇の書  
は軽く眉をひそめた。そして更に触手を操る。

「ううんっ!? んくっ! ……あう……」

なのはの首に巻き付いた触手がぎゅっと締まったのである。頸  
動脈が一瞬で圧迫され、少女の意識を奪いさる。いわゆる「落ちた」  
という状態である。気を失った魔法少女の小さな手からレイジン  
グハートエクセリオンが滑り落ち、ついで全身を軽く痙攣させな  
がら頭がかくんと落ちた。ツインテールがそれにつられるように



ばさりとしなだれる。

「なっ、なのは、なのは!? なのはをに何をしたんだ!!」

親友の突然の沈黙にフェイトは動転し、目を吊り上げて怒鳴った。怒りにまかせて全身をじたばたともがかせて触手の戒めから

逃れようとするが、強固な肉纏は全くびくともしない。魔法とバリアジャケットを身に纏い、ある程度は力も強化されているとはいえやはり年端もいかぬ少女である。ましてやフェイトはスピードタイプ、触手との力比べでは圧倒的に分が悪かった。

あがくフェイトを見据えた闇の書は

「少しの間眠って貰っただけだ……。全ては、主の願い。主が愛した騎士達以上の苦しみを与えて、破壊する。まずは、お前からだ……」

と告げた。流れ続けていた涙は止まり、今ほどか冷酷さすら感じさせるほどの無表情へと戻っている。

それでも、彼女は先ほどまで涙を流していた。自分を道具であると言い切ったが、確かに感情を見せたのである。フェイトは説得を諦めようとはしなかった。

「シグナム達を傷つけたのは私たちじゃ……んくうっ?」

しかし、闇の書は聞く耳持たぬとばかりに皮ベルトに包まれた腕を振った。

その途端、再度の説得の音が上ずった叫びに変わった。胸のあたりを突如として走った、ピリツとした不思議な感触。

何事かと思えば、身体中に巻き付いている触手が妖しく蠢き始めているのではないか。ソニックフォームは上半身から下半身までスパッツのような密着したバリアジャケットであるため、フェイ

トのまだ青い果実のような肢体がくつきりと露わになっている。

発育途中であるが、可愛らしい両の膨らみ。乳房、いや、おっぱいのかわいらしさを上と下の所でまかれた二本の赤ベルトが強調しているように見える。

そしてなだらかで、どこか引き締まったような印象を与えるお腹。ここもまた黒衣の魔法少女が身に纏うバリアジャケットの特徴である太いベルトが巻かれている。そのためには目には見えないが、下では可愛らしいおへそのくぼみすらがくつきりと浮かび出ている。

スピードを得るためのソニックフォームである。そのため余計なマントや防具類はついておらず、装着者の動きを阻害しないためにバリアジャケット自体もびつちりとスレンダーな肉体に張り付いている。

しかし、今回はそれが悪い方に出してしまった。

しゅるん……

漆黒のバリアジャケット越しに薄く盛り上がる両乳房に異性物が絡みついてきた。発達途中のなだらかな丘のふもとを円を描くようにしてなぞり上げている。

「な、なにをっ……んく……」

最初に感じたのはくすぐったさであった。まだブラジャーを着ける必要すらないほどの小振りな胸は、もちろんだれにも触らせたくない。そんな場所をいじりまわされているという事

女の子として、恥ずかしい場所をいじりまわされているという事実にフェイトの抜けるような白磁の顔にほっと朱が指した。

幾度か擦られているうちに、段々単純なむず痒さではない何か

が胸の内に産まれた。胸の奥がぼうっと熱くなり、段々じんじ

んとした自分でもよく分からない不思議な疼きが高まってくるのだ。それは決して不快な物ではなく、むしろ気持ちいいと言えるような感触。

触手の先から生えた三本の爪がすいっ、すいっとなを掻くように乳房の周りを動くと、バリアジャケットの裏地の滑らかな感触も手伝って、びりっぴりっとした暖かい疼きがどんどん高まっていった。温かみはどんどん乳房の奥へと収束し、まだ可愛らしいおっぱいの頂点でふくり、と小さな乳首が屹立する。

「お、おっぱい……あつたかい……」

今までに経験したことのない不思議な感触だった。何となく全身が重く気だるくなっていき、その代わりに奇妙な心地よさが充滿する。

「ふうん……く……」

思わず鼻にかかった熱い吐息を漏らしてしまふフェイトである。険しい表情は徐々にではあるがゆるみ始め、吊られていた瞳がゆっくりと下りていく。

触手の先端はゲームセンターのプライズマシンのキャッチャーのような形をしており、三本の爪が生えている。その爪が、黒いバリアジャケットごしに肉丘をふにゅふにゅと採み込み始めた。

「ふにゅっ、きゅっ、くにゅう……」

「ん、くうんっ!?」

若々しい張りをもった肉の丘に爪が食い込む。一瞬ちくりとした痛みを感じたが、それもすぐ収まった。代わりに、むず痒さと



紙一重の妖しい心地よさが胸一杯に拡がっていく。幼いながらも性的興奮に張りつめ始めた乳房を、触手は徹底的に揉み込んでいった。抜群の弾力を持った乳房がへこみ、そして元に戻りを繰り返す。その度にフェイトは

「はん……んう……」

と熱い吐息をこぼしてしまい、ソクソクツとした感触に身を震わせてしまうのだ。

胸の中に充滿していた熱は胸乳を揉まれることで更に高まり、小さな胸に入りきらなかった熱量はお腹の奥へと溜まっていく。おへその下辺りが、急にぼうつと熱くなってズクンズクンと今まで感じたことのない疼きが産まれる。

「はあ、は、ふ……」

「なんだ、これ……。魔法、なのか……?」

とろんと下がった目尻の端に涙を浮かべたフェイトは、そんなことを考えていた。まだ年端もいかぬ少女である黒衣の魔法少女には性的知識もない。自分が今感じているのが快楽だという意識もなかった。

だが身体は正直なもので、バリアジャケットに包まれていない腕や太股から下に珠のようなほの香る汗がぶつぷつと湧きだし、気持ちよさに身悶えるたびにきらきらと舞い散っていく。閉鎖空間の一部に少女のレモンのようなフェロモン臭が漂い始めた。

「ん、く……」

「耐え……なきや……。なのだが、はやてが……!」

ともすれば身を任せてしまいたくなるような、ぬるま湯につかったような快感。しかし流されるわけにはいかない。今自分の身に

加えられているものがどんな魔法であれ、愛する親友と、新たな友達を救うためには絶対に負けられないのだ。

フェイトはじつとりとした汗に濡れた指めきグロブに包まれた両手と、鉄のシューズの中で突っ張っていた両足指をキュツと丸めた。そして、半ばまで垂れ落ちていた目尻を再び吊り上げる。

「こんなことしても、なんの解決にもならない……! お願い、はやてを……」

必死の説得も聞の書には届かなかった。返礼代わりに触手爪がバリアジャケット越しにも分かるくらいびんびんにしこり立った乳首を弾いた。

「ひうっ!!」

ピンつと弾かれた途端に電流のような痺れを感じた。一瞬脳内でバチバチと白い閃光がスパークし、身体が勝手にギクギクつとのけぞり返ってしまう。金色の美しい髪がさらつと流れて、紅潮し、汗の浮き出る頬に幾筋かはりついた。

「おっばいが……ヘン、だ……!」

鼓動が今までの戦闘でもなくくらいに強く、そして早くなる。胸とお腹の下から産まれた火照りは全身にまわっていき、露出した二の腕と太股から下の足がさあつと桜色に染まっていった。更に触手は間断なく責めをつづけた。今度は触手爪のベースに当たる卵状の部分を、充血乳首に押しあてる。

「こりっ。」

「きやう!」

その瞬間に強烈な快感美が閃き、脳で稲妻の如く炸裂した。身体が先ほどよりも強く弓なりにしなり、囚らずも胸を突き出す格

好になってしまふ。そんな「据え膳」になった状態の美少女を触手は見逃さない。乳首に押しつけた卵部分を軽くバイブレーションさせながら右へ左へ、くきくきと敏感肉突起を折り曲げて小指

の先ほどもない快感器官をいじめ抜いた。そのみならず、張りつめた乳肌を爪が優しく円を描くようにしてくやくやくと揉み上げるのである。乳首と胸から送り込まれるダブルの刺激が狂おしいほどの快感電流となり、フェイトの全身を駆けめぐって美少女の肉体を芯からとろけさせていく。

「はうんっ! くうっ、ひ!」

何度も何度も乳首から発生する快感電撃がフェイトの胸を焼き、そして腰を焼く。

フェイトの口から甘い悲鳴が漏れ、漆黒のバリアジャケットに包まれた肢体がカクンカクンと強く揺れた。耐えるように硬くつぶられた瞳からは隠しきれない随喜の涙が浮かび、頬を濡らしていく。体表面から無数に浮き出る美少女の甘酸っぱい汗が全身をしつとりと濡らし、防護衣の黒がより一層濃くなった。

さらにもう片方の乳房には違う責めが加えられた。これもまたバリアジャケット越しにくつきり見えている乳首を三本の爪で抓んだのだ。そして、きゅいつとひねり上げる。

「ひうっ!」

一瞬息が詰まった。最初は痛みなのだが、すぐにそれが心地よさに変わってしまう。直接の責めではなくて、防護衣一枚越しなのが幸いした。直接だったならおそらく強烈な痛みを感じただろう。

だが布一枚挟むことによって刺激は幾分かマイルドになり、そしてバリアジャケットの内布で滑らかに擦られて心地よさへと変換



されるのである。さらりとした魔法衣の感触は極上のシルクのように、くすぐったくもあり気持ちよくもある。そんな布でぎゅうぎゅう敏感な充血乳首を圧迫されるのである。

「お、おっぱい、もう、やめ……」

紅潮し、切なげな表情でそう言うフェイトにはまた年端もいかぬ少女とは思えないほどの色香が漂っていた。しかし主の願いを叶えようとする闇の書は当然そんなことを受け入れるはずがない。更に激しく乳首を颯り倒す。

今度は根本から爪を食い込ませ、つまみ上げるようにして責める。きゅうつと引つ張り上げられる乳首に吊られて、乳房も一緒に持ち上がった。

「い、痛あつ……！」

だが、ただ痛いだけではなかった。苦痛の中に潜むわずかな快感。それは乳首を引きちぎらんとばかりに強烈に引つ張られると更に増大していく。激しく強烈な刺激がどこか気持ちいい。引き延ばされ、爪を食い込まされた乳首にはじけ飛んでしまうようなほどの熱い疼きが発生し、もつと強く、そしてきつく責めて欲しいような気分にならなってしまうのだ。それを示すかのように、触手爪の苛烈な責めの中にあつて乳首は更に硬度を増し、バリアジャケットを貫きとおさんがばかりに完全勃起している。

（こ、こんなのって……）

たまらなかつた。未知なる感触に全身がかつかと火照り、いまや汗みどろである。間断ない責めを受け続けているおっぱいと乳首、そして股間が最も熱く、燃えたぎるようである。フェイトの割れ目は執拗な乳肉颯りにあつて、大人としての反応を示そうと

していた。

すなわち、愛液の分泌である。むずむずしてしようがない股間に、じゅくりとした微妙な湿り気を感じる。

（汗が……股間に……？）

その部分を「おしっこをするときの穴」としか認識していないフェイトの性知識ではそのぐらいの判断がせいぜいだった。しかし、奥から微かにこぼれ始めた物はもちろん汗ではない。少女の濃いフェロモン臭を漂わせる愛蜜は、ピッチリ閉じられた秘裂からとろりとこぼれだして、スパッツ状のバリアジャケット股間部に吸収される。湿り気を帯びた布地は魔法少女の股間により強く密着し、タテスジがはつきりと浮き出してしまっていた。

数本の触手が、強烈な性臭を放ち始める股間へと忍び寄っていく。そして、目的地に到達するや否や、二本の触手がスパッツ越しに浮き出ている割れ目の左右両端に爪を引っかけたのである。

「うあつり？ そ、そんなところ、は……！」

もちろん誰にも見せたことのないおしっこの穴である。ましてや触らせたことなどあるわけもない。そんな大事な部分がおぞましい触手に触られているのである。途方もない恥辱行為から逃れようとポニーテールを打ち振って悶え始めた。しかし、そんな分からず屋を律するかのように胸を責めている触手が乳首を爪でカリつと掻いた。

「ひゃうっ!!」

若干強い刺激であつた。乳首が破裂しそうな程の心地よさが爆発的に走り、フェイトの全身がびくびくびくつとのけ反ってしま

そうして魔法少女の動きを封じてから、間髪入れずに股間の触

手が左右反対方向へと割れ目を引つ張った。くはあつ……。

「っ……!!」

とうとう少女の秘められた部分が糸を引いて大きくくつろげられてしまった。バリアジャケット越しではあるものの、汗とぬるぬるした液でびったりと張り付いてしまっており、その姿がほとんど透けて見えてしまっている。防護衣が完全に身体にフィットする構造だったのも災いしたようだ。

（私の……大事なところが……）

極限の羞恥にフェイトの白磁の肌は火を吹かんがばかりに紅潮した。くなくなく身を揉んで何とか隠そうとするが、宙に浮かされ、さらに両脚を固定されている状態では無駄な努力でしかない。

執拗なまでの乳房責めで充分煮ええたぎった子宮から送り出される生命のスープは止めどなく流れだし、スパッツ状の部分にどんどん溜まっていく。やがて吸水容量を超えて黒い布地からしみ出し、たらーつと糸を引きながら地面に落ちて恥ずかしい池を作っている。

（な、なんだ……これ……おしっこ、でも、ないし……）

困惑してしまうフェイトであつたが、何となく「恥ずかしいことだ」ということは理解できたようだ。女としての本能的な物であるのか。恥ずかしげにうつむいてしまった。

そんなフェイトを余所に、闇の書に操られた触手達は更なる凌辱を加えるべく蠢き始めた。布越しに大きく揺げられた秘穴に触手が向かう。目指す先はヒクヒク蠢くおしっこの穴のさらに上に







しない、美しい瞳。

「……」

その何処までも綺麗な瞳に見据えられた闇の書は、言葉を止めた。そして、一瞬触手の動きも止まる。

(わかってくれたのか……?)

そう思ったとき、闇の書はぐいっと止めどなくこぼれ落ちる涙をぬぐった。その後には微かに感じられた悲しみも、とまどいのようにも見える涙も、一切が消え去り再び無表情な「道具」としての顔に戻っていた。

「私は主の願いを叶えるのみ……。永久の眠りにつくがいい……」

そう言うと、皮ベルトがまかれた白く細い腕をすつとフェイトに向けた。フェイトの周り三百六十度に幾本もの短剣状のエネルギー物体がふつと現れる。

「……!!」

先ほどと噴らった攻撃魔法だ。しかし、先ほどとはやや色が違った。なのはと一緒に攻撃をされた短剣状のエネルギーはまるで血のように赤い燐光を放っていたのだが、今回の物は紫色の燐光である。だが、どちらにしても非常に危険なのは変わらない。

(まずい……)

ただでさえ至近距離である。しかも、今回はなのはのサポートも受けられない上に、自身は身動きもとれない。更に防御力を極限まで減らしているソニックフォームとあつてはバリアジャケットの防護効果もほとんど期待できない。まさに絶体絶命である。

「黒い欲望に染まれ……」

闇の書の無感情な声と共に、一本の短剣がフェイト目掛けて放

たれた。

「……!!」

おそろくは襲ってくるであろう強烈な激痛に耐えるため、両手両足指を握りしめ、黒いスパッツ状の布地に包まれたお尻にキュツと力を入れる。

先ほどの一斉射撃とは比べものにならないくらいゆっくりとしたスピードで飛来したエネルギー弾は、すうっとフェイトの下部に吸い込まれるように突き刺さった。

「……え？」

痛くない。なのはと一緒に受けたときは壮絶な爆発を伴った。

今回もそのはずだ、と思っていたのだが……。

(違う魔法なのか……?)

と、無意識のうちに気を抜いた、次の瞬間。

トスっ。

「!! ああああああ……!!」

下腹部が炸裂したかのような強烈な激感がフェイトを襲った。しかし、それは間違いない痛みとは異なる感覚。たとえて言うならば、股間の肉豆と乳首を弾かれたときの気持ちよさをプラスして、十倍したかのような恐ろしいほどの心地よさ。お腹のあたりで産み出された異常な快感は、あつという間に炸裂して身体中を駆けめぐる。頭のとつべんから足指の先までが信じられないほどの喜びに満たされ、びくびくと痙攣するように震えた。

黒衣の魔法少女は全身を背も折れよとばかりにのけ反らせた。ギクギクと病的なほど肉体を痙攣させながら、目を見開いて舌を突きだしてあらん限りの絶叫をはなってしまう。その声はとて

年端もいかぬ少女とは思えないほどに艶めいた悶声だ。あまりにも気持ちよすぎて、声が勝手に出てしまうのである。

抜けるような白い肌がまるでゆであげられたかのように真っ赤に紅潮した。毛穴という毛穴が開いて玉のような汗がふわっと溢れ出し、魔法美少女の全身から飛び散っていく。薄暗い空間にきらきらと舞う汗の滴は幻想的ですらあつた。爪触手にくつろげられた秘唇からは、真っ白く濁り、粘った本気の愛液がびゆるびゆると出る。

(こ、こんな、こんな……!!)

信じられなかった。今まで生きてきた中で最高の気持ちよさ。未だセックスのセの字も知らぬような少女に耐えられるような快感ではない。目の前に桃色の霞がかかり、頭の中ではいくつもの白い稲妻と極彩色の花火がバチバチと弾けていた。本人にはよく分かっていなかったが、少女の身ながら絶頂を極めさせられていたのである。

だが、これで終わりではない。フェイトの周囲にはまだ無数のダガーが浮遊しているのだ。たった一本の攻撃だけでも悶え苦しんでいた黒衣の魔法少女に、闇の書は情け容赦なく連続攻撃を加えた。

数本の紫色の燐光を放つ魔法弾が、再びフェイトの下腹部——少女には分からなかったが、子宮である——にゆっくりと吸い込まれていく。そして、愛液を止めどなく沸き立たせている敏感な肉壺に同時に突き刺さった。

トスっ、トスストスっ。

「!! ……………!!」



今度は声も出せなかった。先ほどの刺激など兎戯としか思えないほど、強烈で理不尽なほどの快感がフェイトの幼い子宮内で炸裂したのである。耐えられるはずなど無かった。頭の中が本当に炸裂しそうだった。呼吸が一瞬詰まり、心臓が止まってしまおうのではないかと思うほどの超絶快感だ。細胞の一つ一つが喜びを訴え、触れる物、感じる物みな快感である。触手が肌を擦れる感触はもちろん、ひゅうひゅうと辛うじてしている呼吸で空気が喉を通る刺激ですらが心地よすぎる。頭が本当に真っ白になり、何も考えられない。

(は……あ……あ……!!)

魔法少女はあつという間に先ほどより数段高い絶頂の粹に放り上げられ、全身を狂ったかのように震えさせた。男も知らぬ肉体が無意識に空腰を使ってしまう。その腰からは破れた水風船のように止めどなく愛液がこぼれだしまくり、ついには――

ふしやああ……

気づかぬ内に失禁までしていた。ぐちよぐちよに濡れそぼったバリアジャケットの股間部は吸水容量をとくに超えており、何もなにかのように愛液とおしっこを勢いよく進らせてしまう。

(あはあ……)

だが、尿がこぼれていくその感触すらも今のフェイトにとって、は壮絶な快感の一つに過ぎない。もはや恥ずかしい、といった感情などどこかに吹き飛ばされていた。

濃厚な愛液と、尿の入り交じった美少女の恥ずかしい芳香が境界内に充満していく。しかし、そのニオイでさえもがフェイトにとっては芳しく感じられてしまうのだ。

「……」

これ以上は狂い死にしようかとも知れない。それほどのフェイトの痴態を見ながらも、なお闇の書は無表情であった。そして主の愛する騎士達を奪った憎い魔法少女に更なる鉄槌を下した。最後に残っていた二本のダガー。それらがゆっくりと動き出した。二本はフェイトの張りつめて、ツンツンに突ききつてバリアジャケット越しにでも容易に分かる乳首に。そして最後の一本は快感神経の極み、クリトリスへ……

壮絶で凄まじい絶頂の海に飲み込まれているフェイトに、それに気付くはずがない。よしんば気付いていたとしてもどうしようもなかったろう。非情なまでの快感攻撃は、遂にとどめの段階に入った。今だ子宮責めに翻弄され続け、半ばほど桃源郷に遊んでいる美少女の両の乳首、そしてクリトリスに快感の短剣が突き刺さる。

トスっ。トスっ。トスっ。

「っあ……!!」

三つの敏感な肉豆の中で、甘い痺れが炸裂した。胸が、股間が破裂しそうなほどの気持ちよさがわき起こった。それらは身体の中で、心で共鳴し合い、増幅して全身へと流れ込んでいく。身体の中で全てが快感で埋め尽くされてしまったようだった。もう肉体の中で気持ちよくない所など何処にもなかった。今まで気にしたことすらなかったバリアジャケットの裏地と肌が擦れる感触も全身を

舐めしやぶられているかのように感じられて気持ちよくて堪らない。どこから吹いてくるのか、微かな風が火照った剥き出しの二の腕や太股をくすぐるわずかな刺激でさえも絶頂のトリガーに

なってしまう。

(あらし……ひんじやう……!!) もう、ひんじやう……!!)

身体の中でスパークし続ける猛烈な快感の稲妻は涼々しい魔法少女の心をも焼き尽くし、自我までも溶かして甘い快楽へと変換してしまおう。いつまでたっても終わらない快感の波にフェイトの意識は飲み込まれていった。

「……ん……」

フェイトは鉛を詰め込まれたかのように重いまぶたを苦勞して持ち上げた。まだ意識がもうろうとして、視界がはつきりしない。身体中が気だるく指一本動かす気にもならなかった。

(私……一体……)

どれぐらい意識を失っていたのだろうか。バリアジャケットに包まれた全身がしっとり濡れ、びちよびちよになった股間部はまだ生暖かい感じがする。それほど長い間の失神ではないようだった。

ゆっくりと記憶が戻ってくる。身体中をまさぐられ、今までに感じたことのない壮絶な心地よさ。いまだにおっぱいとお腹の奥がずくんと甘く疼いているようだった。ミッド式でもベル方式でもない恐るべき魔法に翻弄され、おしっこの穴からヌルヌルしたお汁を迸らせて声の限りに叫び、悶えた……

(負け……ちゃったんだ……)

決定的な事実。それでも、悲しみはなかった。その昔なのほと自ら望んで対決したときのようにすがすがしい負けではない。むしろほろ負けで、完膚無きまでに叩きのめされたといった方が正







解である。それでも、悔しくはなかった。もちろん一瞬は恥ずかしさ、悔しさ、悲しさが胸の内を占めたのは事実である。しかし、闇の書が浮かべていた無表情の中に潜む悲しみ。そして止めどなく流れ続ける涙。それを思い出すと

(仕方なかったんだ、あの子は……)

そう思えてくるのだ。そう感じると、怒りも悔しさも消えていった。

思考を巡らせているうちに意識がはつきりしてくると、色々おかしいことがあるのに気づく。

「ん、くうっ!」

まず、はつきりとしてきた視界は全てが反転していた。全ての物が逆さにひっくり返っているのである。そして、両脚と両肩に走る強烈な激痛と、奇妙な浮遊感。一度は完全に意識を手放してしまつたので自分の魔力で飛んでいるわけではないのは間違いなかった。それらを総合して判断すると、

(吊られてる……)

ということになる。重力のせいで体重がかかった両肩と足に痛みが集中しているのだ。よくよく見れば自分の両脚に触手が幾重にも巻き付き、限界ぎりぎりまで割り裂かれていた。それはほとんど真一文字に近く、それなりに身体の柔らかいフェイトにとつても結構な苦痛である。股関節がぎしぎしと痛み、端正な顔が歪む。自分からは見えないが、背中側に回されている両腕もおそらくは同じような状態なのだろう。

(これは一体……)

周囲を見回してみると、視界の端に未だに気を失つたままのな

のが見えた。触手に拘束されているのは相変わらずだが、乱暴をされたような形跡はない。

(よかつた……)

自分が受けたような責めを受けさせられていなかったことにフェイトは心底からほっとした。

(なのは、かならず助けるから……)

親友を自分の様な辛い目に遭わせたくはない。なら少しでも長く耐えて、闇の書を説得する機会を見つければいい。新たな決心を胸に秘めるフェイトであった。

「まだ、壊れないのか……」

そんなフェイトにゾツとするほど冷たい声がかげられた。しかし、声はすれども姿は見えない。おそらくは自分の背後から話しかけているのだろう。感情を感じさせない声色に一瞬飲み込まれそうになるが、まなじりを決して強く叫んだ。

「間違ってる……こんな事、間違ってる……! お願だから、私たちの話を聞いて……! 話をしよう……! きつと分かるから……! はやても、なのはも、私も、分かつてあげられるから……!」

何度目の説得だろう。今回も無駄かも知れない。それでも諦める気にはなれなかった。何度でも何度でも呼びかける。頑なな心を聞くには、言葉しかないのだから。例え今は戦い合っているとしても、言葉を紡ぎ続ければ必ず何か伝わるのだから……! 強く、優しい親友が自分にくれたことを今、自分がしなくてはならない。無感情で、そして自分を道具であると言いつける可哀相な、どこかかつての自分に似た闇の書に……

「……物と話をするなど無意味でしかない。私は魔導書、道具に過ぎないのだ。……もう、時間がない。主の願いを叶えねばならない……」

「……」

闇の書の言葉は変わらなかった。純真な想いと、歪められた想い。互いの意思は何処までもすれ違い、接点を見出さない。

(それでも諦めない、諦めたくない……!)

そう思ったフェイトがもう一度口を開こうとした時、闇の書が動いた。無言で皮ベルトが巻かれた右腕を振る。瞬間、宙にベル方式に酷似した魔法陣が描かれた。

「っ!」

全ての行為が反対側で行われているためにフェイトには見えなかったが、魔力発動が起こったときの独特の空間のふれで何かが起こっていることを察知する。しかし、だからといってどうすることも出来ない。完璧に拘束されている上に、何度も味あわされた責めのおかげで身体中に力が入らない。魔法を行使できるだけの魔力もそがれてしまっているようだった。

「!」

フェイトの表情が変わった。この地響き。先ほどコンクリートから触手が飛び出してきたときと全く同じなのである。ということは、ここから何か召喚されてくるのである。一体、何が……? 金髪の魔法少女は眉をひそめた。

びきびきびきいっ! どごおおん!!

雷が落ちたような轟音を響かせながら、硬いアスファルトを割つ



て飛び出してきたのは先ほど飛び出してきた触手と一緒に出てきていた、あの太い触手であった。それはフェイトの目の前までせり上がってくるとびたりと止まり、ゆらゆらと妖しげに蠢いている。

よく見てみると、先端はフェイトの腕ぐらいに細くなっているが下に行くに連れて太股ぐらいまで太くなっていつている。長さ地面内部にまだ潜り込んだままの部分想像すると、相当な長さであるに違いない。そして、その表面には今までの触手とは違っていていくつものウロコのような物がびっしり並んでいるのだ。裏は硬質な甲羅のような物がかわらのように重なって配置されている。(これは……)

そこまで見て、フェイトはようやく触手の正体を悟った。これは以前シグナムと対峙した時に彼女が闘っていた砂竜なのだ。細い肉繩はバベルカの騎士を戒めていた物であるし、今黒衣の少女の前にあるものはおそらく尻尾あたりなのだろう。

(なるほど……)  
闇の書は一度蒐集した魔法使いの魔法をコピーできる。ということは、以前にシグナムが倒していた砂竜の存在その物もコピーできる、ということなのであろう。そう考えれば合点がいく。しかし、その代わりに新たな疑問が浮上する。

(こんなもので、一体どうするつもりなんだ……?)  
細い触手なら拘束などに使えるだろうが、ここまで太いとかえって使いようがない。事実、先ほども出ては来たがすぐどこかへ潜り込んでしまっている。と、なると……。  
(……まさか……!)

フェイトの脳裏に最悪の予想が浮かんだ。もしや、闇の書はこの巨大な砂竜の尻尾でひと思いに串刺しにしてしまうのでは……! さすがに魔法少女の表情も青くなった。いくら魔法で現代医学とは比べものにならないほどの治療が出来るとはいえ、死んでしまった者を蘇生させることが出来るわけではない。

「……っ」  
フェイトの顔面が蒼白になった。

幾多の魔法戦をくり抜き抜けてきたフェイトの心中に、初めて恐怖という感情が芽生えた。シグナムと干戈を交えたときにも感じなかった感情である。あのときは戦いの中にお互いの信念をぶつけ合い、好敵手として技を競い合っているような、そんな感覚すら覚えたものだ。しかし、今回は違う。明らかに自分に対する害意しか感じられないのである。

身体中が震えた。歯の根が鳴ってしまいそうなほどに、恐い。(なのは……アルフ……クロノ……リンディ……提督……!)  
砂竜の尻尾はゆっくりと伸び続け、フェイトの背後へまわった。その後も更に伸び続ける。

(……違う……?)  
いきなり殺されるような串刺しではないのか……そう思っただけで安堵するフェイトだったが、すぐにそれは消し飛んでしまった。なんと、砂竜の先端部分がバリアジャケット越しにくっきりと透けている割れ目にひとりど密着したのである。

「!!」  
再びフェイトは顔面蒼白になった。どう考えたって「おしっこ」の穴にそんな物が入るわけがない。やはり串刺しなのか……!

冷静に見たとしても、やはりそれは入りそうになかった。まだ男を知らない未開、いや、未成熟の処女穴はあまりにも窮屈でとてもではないが異物を受け入れられそうにはない。先ほどまでの乳首責めや性感魔法攻撃で十分すぎるほどに潤ってはいたが、髪はまだ未発達でほとんどつるつるに近い。まだ少女その物の清廉な姫穴なのである。

だが、闇の書はそんなフェイトの肉体事情には全くお構いなしだった。それはそうだろう。主のためを思い、どす黒い復讐に身をゆだねた「道具」が仇の事など気にするはずがない。

ついに砂竜の尻尾はフェイトの内部へと侵入を開始した。触手の爪によってはつきりくろげられていた割れ目の真ん中に、尻尾の先端がびたりと密着する。

「くっ……ん……」  
砂竜の生物だからなのか、奇妙なほどの暖熱さが股布越しに感じられた。先端の細い部分はおしっここの穴のわずか下、膣口に狙いを定めている。スパッツにも似た密着防護衣が灼熱の棒にも似た小さな穴をきゅうきゅうと圧迫すると、じーんとした、甘い不思議な感触が胸中一杯にあふれた。先ほどまで手の付けられないほど燃えて熱く煮えたぎるようだった下腹部が、棒の熱に呼応するようにまた火照り始めた。そしてきゅんきゅんとお腹の中で疼きを再開し、愛汁が再び分泌され始める。

(どうして……恐い、はずなのに……)  
確かに恐怖心を感じる。しかし、何故か胸の奥で微かな期待感を感じてしまうのだ。触手や性感魔法で誘われてきたフェイトの性は普通の女の子よりも遙かに早く花開いてしまっていたの



である。乳首やクリトリスを触られる喜びを知り、子宮には快感を強く刻み込まれてしまった。本人は意識していないが、絶頂のめくるめく浮遊感と恍惚も味わっている。これだけの快感を教え込まれた小さな肉体は、本人の意思とは無関係にもっと深い性の極みを求めていたのである。つまり、女性器と異物による交合、秘唇に硬い物をねじ込まれ、快感を貪っていきまくりたいというあさましい欲望……。

フェイトの無意識な欲望を充足するべく、砂竜は動き始めた。バリアジャケットごと未開の処女地へと侵攻を開始したのである。

みきっ！ みきみきみきっ……！！

「うあああっ！ い、痛い、痛いっ……！！」

指一本すら受け入れたことのない処女穴である。そこを強大な質量によってこじ開けられるのだから痛みが伴うのは当然であった。フェイトの全身に脂汗が浮き、股間を割り裂かれそうな強烈な痛みが身体中を駆けめぐった。挿入、と言うよりは肉を割っていると言った方が正しいのかも知れない。愛液でべとべとに濡れているとはいえず、バリアジャケットをも伴った侵攻なのである。

先端部を無理矢理こじ入れた砂竜は、そこで一旦動きを止めた。

(無理だと悟ってくれた……?)

フェイトは心底からホッと、溜息をついた。……しかし、

(なに……これ……お腹が……むずむずして……)

先端部から膣を通して伝わってくる熱が、フェイトの全身を再びぼつぼつと火照らせていった。砂竜の硬い尻尾にぎつちりとまとわりついている未成熟な裳が、ざわざわとざわめき始めた。

「あ……ん……」

心臓の鼓動がトクントクンと速くなっていく。それと同じように、子宮が更に激しく疼き出し始めた。下へ降りていた子宮口から止めどなく熱い愛液が逆流し、きつすぎる肉穴にはまりこんでいる異物に蜜を止めどなくはき出し続けている。もどかしかった。お腹の奥が熱くて痒くて堪らない。その下、股間のあたりは未だ消えない鈍痛が支配していたが、肉が剛棒の太さになじんできたのか、徐々に甘い痺れへと変わってきている。

(もっ……と……)

腰が勝手に揺らめいてしまった。その度にぎちぎちに肉穴にはまりこんだ尻尾が膣に擦れ、

「ひゅっ」

と甘い喘ぎ声が漏れだしてしまっただ。

頃は良しと見たか、砂竜の尻尾が再び動き始めた。遂に本格侵

攻が始まったのである。

ぐりっ！ みきっ、みちみちみちっ……ぐりゅうっ！！

「はあひいひいひいひいひい……！！」

肉を裂くような音と共に、巨大な触手はずっぼりとフェイトの

狭すぎる肉穴を一気に拡張して奥の奥まで潜り込んでしまった。

まだ無垢な割れ目でしかない所に巨大すぎる肉棒が突き立てられ

た様は、あまりにも凄惨で、しかしそれでいて淫靡でもあった。

砂竜の尻尾は子宮口に到達すると、全力で奥の奥を叩いた。

ずんっ、ずむんっ！

「ひっきゃひいひいひい……ん！！」

子宮を押し潰さんがばかりの、強烈なハードアタックだった。

股関節や肩関節が外れるのではないかと思える程の衝撃に、フェ

イトの全身がぐんぐんと大きく縦に揺れた。それに押し出され、膣と尻尾のわずかな合間から水鉄砲のように愛液がびゅっ！ としぶいた。その中には破瓜の血が混じっている。

「はあおおおおああ……！！」

しかし、それでもフェイトが感じていたのは痛みではなく、壮絶なまでの快感であった。子宮を叩きつぶされた瞬間、強烈な快感刺激が下腹からわき起こり脳天まで一直線に迸っていく。頭の中で性感魔法責めの時などは比べものにならないほどの快感波動が炸裂した。急に視界が真っ白く濁り始め、その中で桃色の火花が幾度も幾度も飛び交っていた。

身体が折れそうになるまで弓なりにしなり、顔を晒して感極まった叫びとも、喘ぎともつかないような声が勝手に口から漏れる。

ただ単に挿入されただけなのに、黒衣の魔法少女はあっさり

絶頂に飛ばされてしまったのである。

結合部のわずかな隙間からはどろりと濃厚な本気の愛液がごぼ

ごぼと沸き立ち、しぶき、淫らなシャワーを作り上げていた。漆

黒のバリアジャケットに無数の染みが広がり、普段の魔法少女か

らは想像も出来ないほど緩みきった恍惚の表情を浮かべる顔面に

もべつたりとかかった。

澄んだルビー色だった瞳はもはや濁り、止めどなくあふれる涙

に隠れている。魔法少女として闇の書に對峙し、説得を試みよう

とした時の凛々しさと決意はもう微塵もなかった。

(ひゅ、ひゅ……いい……こ、こんにゃの、こんにゃのおお……し、

しんりやう……)

脳みそが快感のあまりにとろけそうで、思考ですらろれつが回







さらに突き進んでいく。

「うあああああ……っお……んん、んむう……」

全身が快樂漬けにされているとはいえ、さすがに内臓器官への凌辱はどうしようもない違和感と、ある程度の苦痛を伴った。しかし、激痛と言うほどでもない。それどころか、時がたつに連れ、腸管がじんわりとなじみ、痛みは薄れて不思議な快感を発するようになってくるのである。身体の内側から燃え上がるような心地よさに抵抗できるはずなどない。とまどい顔はすぐにまた恍惚の表情へと戻り、触手の侵攻に身をゆだねるように力を抜いた。

やがて体内触手は胃へと到達した。肉の異物が胃の中を暴れ回り、胃壁をコリコリとかきむしるとキリキリとした鋭い痛みと、それに倍する形容しがたい悦びの疼きがわき起こる。

「ひむうっうんっつっ!! あひ、いん!!」

絶対にあり得ない、内臓ファックのめくるめく快感に、フェイトは目を見開いて陶醉してしまう。垂れ下がったポニーテールがカクカクと揺れ動き、幾本かの金髪が魔法少女の火照った肌にはべたりと張り付いた。

触手は思う存分胃の内部を堪能すると、胃酸の強烈な消化効果にもめげずに更に進み、食道へと到る。

「おっおっおっおっつっ!! んぐ、うっ……くっ……」

さすがにこの部分を占拠されると、息苦しい。その上胃からせり上がってきたのである。我慢できない吐き気が訪れ、思わず胃液を戻してしまう。だが、それもほんのわずかなことであつた。二度目の嘔吐感。そして胃液と共に遂に触手が口中から飛び出してきた。

ずにゆめるうううっ!!

（あ……あ……、わらひのなかあ、ぜんぶ、うめられひやった……の……?）

フェイトのうつろな視界に自分の口から突きだした触手がゆらゆらと蠢いているのが見えた。女の子の大事なところを徹底的に蹂躪され、さらには身体の中まで占領されてしまった。凄まじい快樂と、どす黒い絶望感。もう、この快樂に身をゆだねていられるのならどうなつたつていい……

（わらひ……もう……らめ……）

黒衣の魔法少女の全身から、すつと力が抜けた。

「……お前も、我が内で眠るといい……」

闇の書がデバイスを開いた。紫色のベル方式魔法陣が描かれ、触手に犯されたままのフェイトの姿が金色の燐光に包まれていく。

「フェイトちゃん!!」

「……あ……」

吸い込まれる瞬間、誰かの声を聞いたような気がする。しかし今の彼女にはそれが誰の声なのか、わからなかった。







——時の庭園、王座の間。

「うああっ！ ああん、ふ、ひくううっ……!!」

広い空間に喘ぎ声が高らかに響き渡った。声の主は、フェイト・テストロッサである。美少女は背後から触手にさんさんに突き通されていた。肉縄がフェイトの幼い股間を一突きするたびに、たっぷりと愛蜜が飛び散って石の床を汚していった。

「どう？ 触手の味は……」

彼女の母である、プレシア・テストロッサ。妖艶な笑みを浮かべた大魔導師は股間から生えた魔導のベニスで、実の娘のアナルを飽くことなく貫いていた。黄色い膣液を帯びた肉棒がにゅぷつ、ぬぷつと肛門を抉り、腸を突くたびに金髪の魔法少女は「はひいっ！ はひい！ きもちいいれすう、母さあん!!」

と痙攣したような喘ぎ声と共に声高らかに叫んだ。

小振りなおっぱいも触手によってさんさんねふられ、心地よさが胸の内でも幾度も幾度も炸裂する。

さらに……

「きもちいい？ フェイトお」

剥き出しになった魔法少女の股間で、クリトリスをいじり回しているのはアリシアだった。彼女の姉妹「だったはず」の、少女。小柄な少女は人差し指でころころと肉芽を転がし。時には掴んで激しい刺激を与えてくる。その度にフェイトの腰がビクビクッと震え、更に大量の、そして濃い愛液を垂れ流してしまうのだ。

「いいっ、いいの、もっと、もっとそこ、いじって……!」

（違う……これは……夢だ……母さんは私にこんな風に笑いかけてくれたことは一度もなかった……。アリシアも、リニスも……今は、

もういない……。でも、これは……)

「フェイトはここを責められるのが好きなのよね？」

プレシアの疑似ベニスがフェイトの腸を抉った。子宮の裏側にを圧迫するスポットを執拗に擦り立てる。その途端に腰がとろけそうなほどの快感が湧きだし、膝がガクガクと震えてしまう。触手で固定されていなければならしくへたり込んでしまっていただろう。それほど気持ち良かった。

「んはあああっつっ!!!」

フェイトは金色の髪を打ち振って肛感に悶えた。例えようもなく気持ちが良い。これだけで絶頂に達してしまうほどだった。ギクギクギクつと身体が勝手にのけぞり、黒い手袋に包まれた手で触手をぎゅうつと握りしめてしまう。

桃色に染まった意識の中で、フェイトは思っていた。

（でも、これは……私が欲しかった時間だ……)

親子三人の、狂った淫夢はまだ始まったばかり。フェイトは歪んだ快感に身を任せ、ゆっくりと意識を閉じていった……







「んっ……んっ……あ……あんっ……」

鼻にかかった甘い声が部屋の中に響いている。

窓から差し込む白い月光に照らされ、可愛らしくも淫靡な響きの声を上げているのは、えんじ色のドレスに身を包んだ少女であった。

「ちびっ子」という表現が似合いそうな小柄な体格で、赤みの強い髪を双房の三つ編みにしており、ちよつとつり目ぎみの気の強い顔立ちをしている。

彼女の名はヴァイター。俗っぽい呼称を使うなら、「魔法少女」である。もつとも、彼女らは自信と誇りを持って自らを「ヴァルケンリッター」と呼んでいる。

そんな誇り高き魔法騎士である少女ヴァイターが、膝を折り立てて仰向けの姿勢になってスカートをまくり上げ、シンプルな白のコットンショーツも腿の半ばあたりまでずり下げた恥ずかしい格好で自慰に耽っていた。

黒い手袋に包まれた指は、まだ恥毛の生えていない慎ましやかなワレメを擦り、拙い技巧で快感を紡ぎ出している。手袋に包まれた細い指は秘裂から湧き出した甘酸っぱい淫蜜でグショグショに濡れており、掻き出された乙女汁は滑らかな内腿まで濡れ光らせていた。

「恥ずかしい？」

薄闇の向こうから柔らかな声かけられた。柔和な響きを帯びた関西訛りの少女の声。

「はっ、恥ずかしいにきまつてる……んあぁ……」

頬を紅潮させ、男の子のような口調で言い返しながらも、ヴァイ

ターは股間を弄る指の動きは止められずにいる。黒い手袋に包まれた細い指が敏感そうなピンクのワレメに沿って上下に滑り、あふれ出す淫蜜を掻き回している。

蜂蜜にいちごの香りを混ぜたような、少女の甘い淫臭が月光に照らされた空気にもわりと混じった。

「恥ずかしいけど、気持ちいいんやね？」

柔らかな中にかすかな艶めかしさを含んだ声流れる。それと同時にかすかなモーター音がして、声の主が月光の中にゆっくりと進み出てきた。

青白い光に照らし出されたのは、電動車椅子に座った少女。淡いピンク色のゆつたりとしたワンピースジャマ姿である。

ショーツカットの前髪の左側を双房、黄色と赤の髪留めでまとめており、優しげな顔立ちをしている。

彼女の名ははやて、闇の書の呪いで両足の自由を失った少女である。

はやての命ずるままに自慰に耽っているヴァイターは、彼女に仕える魔法騎士なのだ。

「はやてが……しるって言うから……だから……」

「そっ、自分でしてるヴァイターの顔、かわいいよ。だからもつと恥ずかしいところも弄ってみせて」

自慰を続けるヴァイターの痴態を鑑賞しつつ、柔らかな関西訛りで声をかける車椅子の少女。月光に照らされた顔はほんのりと紅潮し、彼女もまた興奮し始めていることを示している。

「えっ!? ど、どこを?」

自慰の快感で仰向けにのけ反っていた顔を上げ、主である少女

を見つめるヴァイター。

勝ち気そうなつり目の端には、喜悦の涙がきらめいている。

「……お尻の穴……」

興奮にかすれた声で発せられた淫らな命令に、ヴァイターの顔がギクッと強張った。

「そっ、そんなとこ……恥ずかしいよ……」

もの凄く困った表情を浮かべて言いながらも、黒手袋に包まれた指はお尻の狭間に向けて這ってゆく。

まだ未成熟で尻肉のボリュームが乏しいため、仰向けでM字開脚すると、お尻の穴まで丸見えになってしまう。

ツン、と軽く弄っただけで、華奢な身体がビクンツ、と敏感に反応してしまう。

最初のうちは恐る恐る肛門を撫でていたヴァイターの指は、次第に大胆な動きを見せ始めた。きつく引き結ばれた括約筋の末端を

指の腹でこね回し、指先でコリコリと掻き廻って、性器とは明らかに違う妖しい快感にのめり込んでゆく。

放射状にすぼまった慎ましやかなお尻の穴に、勢い余った黒手袋の指先がクブツ、とめり込んだ。

「はうっうんっ!!」

想像以上に強い快感に身を貫かれてのけぞる三つ編み少女。かかると後頭部で身体を支えるような姿勢で小柄な身体がのけ

ぞり、きつく収縮したすぼまりが指先を食い締めて新たな快感を生んだ。

そのままの姿勢で硬直した身体が二度、三度と痙攣する。

緊張を解いてぐったりと床に横たわったヴァイターは、自分の身



に何が起きたのかわからぬらしく、果然と宙を仰いだまま荒い息をついている。

「いったね……こっちおいで。……弄るのやめたらあかんよ」

優しい声で命じられ、赤いバリアジャケット姿の少女は四つんばいではやての所に這い寄ってゆく。まくり上げられたスカートの股間では、命令に忠実な右手が再び動き始めていた。

「わたしにも、して……イかせて」

「う、うん……」

敬愛する主人であるはやてにおねだりされ、ヴィータの勝ち気な顔に嬉しい表情が浮かぶ。

目の前にある生足の指先に、魔法少女の柔らかな舌が絡んだ。ビチャビチャと唾液音を立てて、ヴィータははやての足指をしゃぶり、頬をすぼめて吸う。

「んっ……そう、いい子やね……」

足指を舐められる快感に心地良さに眼を細め、ねぎらいの声をかけるはやて。

両足は麻痺して歩けないが、感覚はある。

献身的な舐めしやぶりを受けて、はやての身体も甘い匂いを強めてゆく。

小刻みなキスは足の甲からすねへと這い上がり、膝頭の丸みをクルクルと舐め回した。

「くふう……んっ……」

くすぐったげに身をわななかせる主の顔を上目遣いで見上げながら、つり目の魔法少女は献身的な愛撫を続け、舌を這い上げらせる。

なめらかな内腿を熱心に舐め、ついばむようなキスを繰り返しているうちに、はやての股間も甘い蜜の香りを立ちのぼらせ始めた。

「もう足はええよ。ヴィータ、脱がせて……」

切なげな表情を浮かべ、はやては腰をもじつかせた。白いショーツの股間には、楕円形の濡れ染みができている。

「うん……」

ヴィータはコクンと頷くと両手を差し伸べ、車椅子少女のショーツを脱がせてゆく。はやても車椅子の肘掛けに手を突き、脱がせ安いように腰を浮かせた。

股布をしつとりと濡らせたコットン布がスルリと抜き取られ、股間があらわになる。

「自分のも弄りながら、わたしにもして……」

恥ずかしげに頬を染めながらも、愛撫をねだる。

「ごっ、ご奉仕、します……」

ヴィータはまだ幼さの残るフレッシュピンクの秘裂にクチチュクチュと音を立てて指を使いつつ、主である少女の股間に顔を埋める。

「これが……はやての……」

すぐ目の前にあらわになった薄紅色の秘裂からふわりと立ちのぼる甘く纏惑的な媚香にうっとり頬を染め、ヴィータはおおずと舌を伸ばす。

薄げそうに柔らかなワレメに舌先が触れた瞬間、二人の少女は同時にビクンッ！と身をわななかせた。

（はやての味……）

舌に広がる甘酸っぱい蜜の味につり目を細め、魔法少女は熱心なクンニ奉仕を開始する。

火照った谷間に沿って舌を滑らせ、バラの花弁のようなラヴィアをついばむ。

「ふあ……あッ、あんッ！」

華奢な身体をキュッ、キュンッと緊張させ、快感に酔いしれる車椅子の少女。

（はやてが感じてる……。もっと、もっと気持ち良くなつて！）

敏感な反応に気を良くしたヴィータは、チュウチュウと音を立てて膣口を吸い上げ、小さな舌を閃かせてクリトリスを舐め弾く。

車椅子の上でのけ反ったはやての腰が浮き、性器だけでなくお尻の谷間までもが目の前にさらけ出された。

「はやてのことも、きもちよくしてやる……」

柔らかな尻たぶの狭間でキュッとすぼまったアヌスに、ピンクの舌が差し伸べられた。

「あああッ！ やっ、そこは、そこはあああ！」

恥ずかしげに身をよじって逃れようとする少女の腿を両手で抱え上げるようにしたヴィータは、屈曲位になったせいで剥き出しになった性器から肛門へと舌を往復させる。

お子様サイズの体格しかないヴィータだが、その力は人間の比ではない。恥じらい悶える主の抵抗を苦もなく押え込み、熱烈なご奉仕を続行した。

膣口とアヌスに交互に舌を挿し入れてくねらせ、ピンと尖ったクリトリスにキスしてチュウチュウと吸いしやぶる。

舌の動きと連動させて、ヴィータは自分の股間も弄り回してい



る。愛液が泡立つほどに指を往復させ、アヌスに指を注挿させ、クリトリスを摘んでクイクイと扱き上げる。

（あうっ！ やべえ……アタシの方がイっちゃいそう……はやてもイって！）

込み上げる快感に身を強張らせながら、ヴィータははやての勃起陰核に吸い付き、舌をグリグリと押し付けてハードな舐め転がしを仕掛けた。

「やああ、イクッ！ イクウウウウッ！！」

絶頂の大波にとらわれたはやての身体が、激しい痙攣を起こした。

きつく収縮する秘裂の奥からビュッ、プシュッと噴き出した愛液が、ヴィータの顔を熱く濡らす。

「あ、あたしもっ！ くああああんッ！！」

はやての絶頂と同時に、ヴィータも二度目のエクスタシーへと舞い上がった。

二人の少女は痙攣を競い合うかのように華奢な身体をしゃくり上げ、全身が痺れるような絶頂快感を堪能する。

「気持ち良かったよ、ありがとう」

しばし絶頂の余韻を味わった後、紅潮した顔に笑みを浮かべて言いながら、ヴィータの身体を抱き寄せるはやて。

「あ、え、ちよ、ちよっと……」

戸惑った声を上げるヴィータの唇に、はやての唇がそっと押し当てられ、付着した自分の愛液を舐め取ってゆく。

優しいキスの感触に表情を蕩けさせながら、三つ編み頭の魔法少女は深い安らぎを覚えていた。













「なのはさんは受け攻めで言ったら明らかに攻めだと思っただけで、  
受けにまわるなのはさんも見てみたくないか？」

きっかけはチャット上での話でして、  
当初は一緒にフェイトさんもヒドイ事になってしまう予定でしたが  
折角なんでなのはさんメインで苛めてしまいました（恥

描き始める前にネットで調べるとやはりフェイト受けが多く、  
なのは受けの需要に疑問符が浮かんだりもしましたが  
描いてしまえば非常に楽しく進められました。

ま、〇学〇年生の触手モノ描いて  
楽しいだなんて変態以外の何者でもないですけどねッ！！

FUCK！

でも良いさ変態だからFUCK！  
まるで世界のかたすみでこっそり核兵器を造ってる気分  
これからも触手本作っていきますFUCK！！

そんなファックでレイプな私ですが、ありがたい事に  
普通の(?) エロマンガも描かせて頂いておりますので見かけた方は、  
「ああこいつ自分を偽って普通のエロ描いてやがる」と  
ののしってやってください。

普通にラブなエロスも好きなんで別に偽っちゃいませんが（汗

今回はありがたい事にゲスト様からも原稿を頂き、  
中々内容の濃い一冊に出来たと思います。  
蒼井村正さん、高橋良喜さん、B-RIVERさん本当にありがとうございました。  
色々無茶言ったり言われたりで楽しかったです（笑

さて、いよいよ夏も近づいてきました。  
無事に夏コミも受かりましたのでこの本が出来上がる頃には  
またヒィヒィ言ってると思います。  
いつもどおりのFate本ですが、このなのは本に続き、  
割とエロ特化で描こうと思ってます。  
あと余裕があればもう一冊出してみたいところですが……  
でっきる一かな、でっきる一かな  
さてはてほほー。

助けてゴン〇くんッ！！

ふふ…誰かに頼るなんて俺らしくねえ…  
信じられるのはいつも自分だけ嘘ですいつも誰かの世話になってます。  
最後になりますがいつも手伝ってくれている Denim 氏に感謝。

それでは、夏にまたお会いしましょー。

2006年6月12日  
無望菜志@ RUBBISH選別隊



■奥付■

発行 : RUBBISH選別隊

発行日: 07/09/2006 (第二版)

印刷 : (有)井上印刷

連絡先: rss@crest.ocn.ne.jp

URL : <http://www3.ocn.ne.jp/~rss/>





**R E O 2**